

国立歴史民俗博物館が行う研究、展示、広報活動等の業務に係る

自己点検・評価報告書（2022年度）

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立歴史民俗博物館

ごあいさつ

国立歴史民俗博物館（以下「歴博」という。）は、博物館を有する大学共同利用機関であり、日本の歴史と文化に関する資料・情報の収集、整理、調査研究、そして公開を行ってきました。歴博における研究の特徴は、研究資源の収集・研究・展示を有機的に関連させる「博物館型研究統合」という研究スタイルにあります。

歴博を所管する人間文化研究機構では、第3期中期目標期間（2016年度～2021年度）において、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代における様々な課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、専門分野の深化を図るとともに、人間文化の新たな価値体系や異分野融合による新領域創出を目指しました。

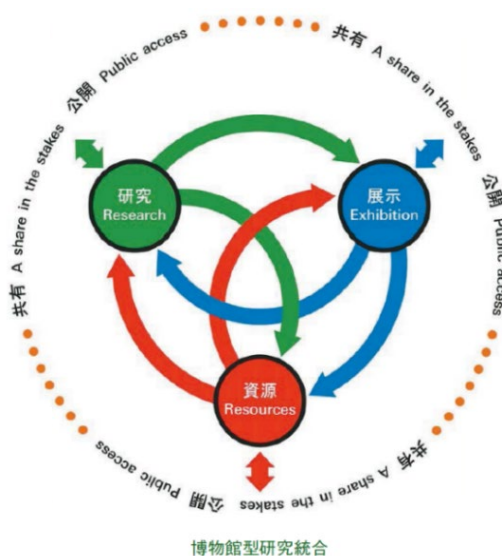
歴博では、この基幹研究プロジェクトへの参画にあたり、研究プロジェクトの推進支援や成果発信の強化をはかるため、基幹研究プロジェクトを歴博の共同研究として位置付け、他の研究プロジェクトや展示等の活動との連携を推進しております。

2022年度は、歴博で行われた基幹研究プロジェクトの研究課題のうち「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」を取り上げ、今後の歴博における研究の推進をはじめとする業務運営の改善や機能強化に資することを目的として、自己点検・評価を行いました。歴博の外部評価委員会による点検・評価をあわせて受けることで、より客観的に課題を検証することができ、今後の展開についても貴重なご意見をいただきました。

あらためて、国立歴史民俗博物館外部評価委員会の皆様に心より御礼申し上げます。

2023年3月31日

国立歴史民俗博物館長 西谷 大



国立歴史民俗博物館 基幹研究プロジェクト歴博ユニット（2016年度～2021年度）

自己点検・自己評価報告書

研究課題名		(日本語)「 古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究 」			
		(英語) Multidisciplinary Research on the Engi shiki: Japan's Ancient Encyclopedia			
研究代表者		氏名	所属・職名	専門分野	
研究副代表者		小倉 慈司	本館研究部・教授	日本古代史	
		三上 喜孝	本館研究部・教授	日本古代史	
研究組織	氏名	所属機関・職名	若手 (40歳未満○)	専門分野	分担課題
	相曾 貴志	宮内庁書陵部図書課・首席研究官		日本古代史	本文研究
	天野 誠	千葉県立中央博物館自然誌・歴史研究部・上席研究員		植物分類学	典薬式研究(植物)
	荒井 秀規	藤沢市生涯学習部郷土歴史課・主査上級(学芸員)		日本古代史	主計式研究(考古)
	石川 智士 17～	東海大学海洋学部・教授		水産学	水産物研究
	稲田 奈津子	東京大学史料編纂所・准教授		日本古代史	本文研究
	小川 宏和 17～	武蔵野美術大学美術館・図書館・学芸員	○	日本古代史・食物史	本文研究内膳大膳式研究(食品)
	小口 雅史	法政大学文学部・教授		日本古代史	文献目録・データベース
	神戸 航介 19～	宮内庁書陵部編修課皇室制度調査室・研究員	○	日本古代史	本文研究
	倉本 一宏	国際日本文化研究センター・教授		日本古代史	文献目録・現代語訳
	小風 尚樹 20～	千葉大学人文社会科学系教育研究機構・助教	○	情報資料学	TEI
	酒井 清治	駒澤大学・名誉教授		考古学	主計式研究(考古)
	中村 光一	上武大学ビジネス情報学部・教授		日本古代史	内匠式研究(物品)
	中村 寛 20～	東京大学史料編纂所・助教	○	情報工学	データベース, TEI
	西川 明彦	宮内庁三倉院事務所・所長		美術工芸	内匠式研究(物品)
	早川 万年	岐阜大学教育学部・非常勤講師		日本古代史	本文研究
	堀部 猛	土浦市立博物館・市史編さん係長		日本古代史	内匠式研究(物品)
	町 泉寿郎	二松学舎大学文学部・教授		医史学	典薬式研究(薬物)
	三舟 隆之	東京医療保健大学・教授		日本古代史・食物史	内膳大膳式研究(食品)
	三輪 仁美 16.9～	宮内庁書陵部編修課皇室制度調査室・研究員	○	日本古代史	本文研究内匠式研究(物品)
山口 えり	広島市立大学国際学部・准教授		日本古代史	英訳	
余語 琢磨	早稲田大学人間科学学術院・准教授		考古学・文化人類学	主計式研究(考古)	
Ethan Segal	ミシガン州立大学歴史学部・准教授		日本古代中世史	英訳	
井上 正望 20～	本館研究部・科研費支援研究員	○	日本古代史	本文研究・現代語訳	
河合 佐知子 20～	本館研究部・特任助教		ジェンダー史	英訳	
清武 雄二	本館研究部・特任助教		日本古代史	企画運営・本文研究	
後藤 真	本館研究部・准教授	○	情報資料学	データベース, TEI	
鈴木 卓治	本館研究部・教授		情報資料学	データベース	
仁藤 敦史	本館研究部・教授		日本古代史	現代語訳	
林部 均	本館研究部・教授		歴史考古学	主計式研究(考古)	
村木 二郎	本館研究部・准教授		歴史考古学	主計式研究(考古)	
○三上 喜孝	本館研究部・教授		日本古代史	典薬式(薬物)	
◎小倉 慈司	本館研究部・教授		日本古代史	統括・本文研究	
		外部 22 名	内部 10 名	計 32 名	

I. 研究目的の達成状況及び成果

研究代表者の自己評価

A : 優れている

当初の研究目的

古代日本の法制書『延喜式』を「古代の百科全書」としての観点から、分析科学・薬学・食品学・考古学・技術史等、古代史（文献史学）以外の様々な分野と協働して研究を進めることにより、新たな視点に基づいた研究を生み出すとともに、『延喜式』の様々な情報が広く活用されるような体制を作り上げる。

これまでの『延喜式』研究の到達点として、2016年現在『訳注日本史料』が刊行中（2017年12月完結）であるが、写本研究・本文校訂の観点からは不十分な点があり、また同書に使用されていない新たな善写本が近年、学界に紹介されてもいる。そこで本研究では、まず写本研究に基づいた新たな校訂本文を作成し、さらに様々な分野の研究者と協働して現代語訳・英訳を試みるなかで、新たな『延喜式』研究を生み出していきたい。

達成目標は大きく分けて以下の2点である。

- (1) 分野の枠を越えた協働研究 **a** 古代史（文献史学）以外の分野、具体的には分析科学や薬学・食品学・考古学等の諸分野の研究者と協働して『延喜式』の研究を進めることにより、古代の知識と技術の現代的活用など新たな視点に基づいた研究を生み出す。**b** 研究にあたっては日本国内のみならずアメリカ等海外の日本史研究者、また古代朝鮮史等の研究者とも連携し、東アジア史の視点を重視して進める。
- (2) 垣根の開放 海外も含めた幅広い分野の研究者や一般の人々が最新の『延喜式』研究成果を把握できるよう、**c** 写本画像・校訂本文にタグ付けをおこなったデータベースや現代語訳・英訳データベース、さらに文献目録データベースを構築して公開する。**d** 作成にあたっては海外の研究者と連携して進めることにより、海外の研究者にとっても利用しやすい形を模索する。

(注)館蔵の土御門家旧蔵『延喜式』写本は、江戸時代前期の書写ながら善写本として知られており、集英社刊『訳注日本史料 延喜式』の底本に使用されている。

I-① 当初の研究目的は達成されたか

研究目的について、何をどの程度達成したか、【当初の研究目的】欄に記入した内容と対応させて具体的に記入してください。また、必要に応じて、博物館型研究統合や総合資料学に関連して設定した研究目的の達成状況についても記入してください。

a 他分野との協働：研究組織に情報資料学・植物分類学・水産学・美術工芸・考古学研究者を加え、中間報告書（『国立歴史民俗博物館研究報告』（以下『研究報告』と略称）218）には各分野研究者の論考を1本以上掲載し、古代史研究者によるそれらの分野の成果を取り入れた研究も掲載できた。情報資料学ではTEI（人文学資料デジタル化のための国際プロジェクト）ガイドラインにも貢献した。2022年3月には古代土器シンポジウム「器名・器形・用途・貢納—正倉院文書・延喜式に見える土器」を開催した（オンライン。参加者117名）。また食品をテーマに共同研究員が実施した科研費（三舟隆之氏代表基盤研究(B)「古代食の総合的復元による食生活と疾病の関係解明」2017～2019、基盤研究(A)「東ユーラシア東辺における古代食の多角的視点による解明とその栄養価からみた疾病」2020～）とも連携した。当初、連携を構想した医学分野については十分に展開できなかったが、総じて目的は達成できたと考える。なお当初は1970～80年代に科学史研究者の間で進められていた延喜式研究会の活動掘り起こしも検討したが、中心メンバーは物故しており、関係論考・記事の収集や電話での関係者聞き取りにとどまった（この他、金漆についてb参照）。

b 東アジアの視点：典薬式や内膳式等に見える薬物・食品と朝鮮半島の薬物・食品等との比較研究を進めた。三上喜孝「慶州・雁鴨池出土の薬物名木簡再論」（『研究報告』218）等では韓国出土木簡の分析により、朝鮮半島の薬物学が古代日本に与えた影響を検討した。準備研究段階での2015年には韓国調査を実施し、2016年開催の歴博フォーラムでは韓国の研究者を招いて報告「古代韓国の鉄と農具」を行っていただいたが、その後、予算面もあり、残念ながら韓国調査は継続することができなかった。ただし古代塗料である金漆に関しては2020年12月およびプロジェクト終了後の2022年5月に研究会を開催し、朝鮮半島・中国を視野に入れた今後の研究発展を計画している。

c データベース構築：大きく延喜式関係論文目録データベースと画像・校訂本文・現代語訳・英訳データベースの構築を目指したが、前者については2019年3月に公開を開始し、毎年データを追加している（2021年12月現在77,910件）。後者については2021年8月にkhirin-a（国立歴史民俗博物館「総合

資料学の創成と日本歴史資料の共同利用基盤構築」プロジェクトにおいて構築されたデータベースのうち、IIIFを活用した画像公開システム)による校訂文の底本でもある館蔵土御門家本写本画像を正式公開し、2022年4月に画像・校訂本文・現代語訳・英訳文を連携させたデータベース「デジタル延喜式」の公開を開始した。当初の目的通りの成果を挙げたと言える。ただし「デジタル延喜式」の公開はまだ一部分にとどまり、今後、作業を継続して少なくとも校訂本文全巻公開を目指したい。

d 海外研究者との連携：英語圏の研究者との連携は、2019年度より院生も含めたアメリカ在住研究者3名の協力を得ることとして、本格的に開始した。日本に招いて英訳ワークショップを開催し、2021年12月には国際研究集会「国境を越える『延喜式』」(オンライン開催。外国人19名を含め、56人参加)を開催した。当初の研究協力者のうち1名が歴博の特任助教に就職したこともあり、研究者育成も含め、当初計画以上の成果を挙げることができた。この他、bにて述べた金漆研究会はZoomを併用することにより、韓国の研究者の参加を得ることができた。

以上、総体として研究目的は達成できたと考える。

I-② 主要な研究成果

本共同研究の成果について、以下の点を含めて簡潔に記入してください。

- ・学際的な共同研究が実施できたか
 - ・波及効果(関連研究者コミュニティや研究分野等への貢献等)
 - ・博物館資源の利活用に効果があげられたか
- ・写本・版本研究に関して、主要写本を調査して京都大学附属図書館所蔵近衛家旧蔵本が館蔵の土御門家本と極めて近い関係にあることを解明し、土御門家本の価値を明らかにする一方で、近衛家本により土御門家本の誤写・誤脱を正せる場合があること、またその他、宮内庁書陵部所蔵壬生家旧蔵本、京都国立博物館所蔵旧京都博物館本、国立公文書館所蔵慶長写本、天理大学附属天理図書館所蔵梵舜等書写本が校訂にあたって重視すべき写本であることを明らかにした。また大和文華館所蔵鈴鹿文庫本等、校訂に有益な情報が書き入れられている版本が存在することを発見し、それらの所見を踏まえた新校訂に着手した。また現代語訳を試みることによって内容の検討を深めることができ、その成果は校訂にも反映された。
 - ・英訳について、2019年度以降、アメリカの若手研究者とともにワークショップを開催し(2019年度2回、2020年度4回、2021年度3回)、2021年12月18日・19日には国際研究集会「国境を越える『延喜式』」をオンラインにて開催した。7名が報告し、古代史史料英訳・研究にあたっての課題を論じるとともに、国際レベルでの学术交流・ネットワーク作りをおこなった。
 - ・延喜式関係論文目録データベースの公開を2019年3月に開始し、2021年12月現在77,910件のデータを公開している。広く日本古代史および技術史関係論文のデータを収録し、延喜式研究会会誌『延喜式研究』掲載論文のPDFデータやCiNiiデータにリンクを貼っている(なお、2022年にCiNii Articlesが廃止され、個々の論考にはNII論文IDではなくCRIDが付されることとなったため、それに対応したデータの修正を検討している)。現在、主として著者名一字目が「さ」行までを公開しており、今後も継続してデータを追加していく予定である。本データベースは、浜田久美子『日本史を学ぶための図書館活用術』(吉川弘文館2020年3月刊)にて「分野別データベース」の一つとして紹介された。
 - ・2017年11月の「TEI 2017 VICTORIA」にて研究協力者の小風尚樹氏が『延喜式』の単位表記に関するTEI(人文学資料デジタル化のための国際プロジェクト)拡張スキーマについての考察を発表したことが、非10進法の単位表記TEIタグセットのガイドライン採用につながり、日本語史料の取り扱いに関して国際的に取り組むためのきっかけを提供する重要な貢献となった。その後、TEIを活用した国際標準準拠システムとして「デジタル延喜式」を構築し、2022年4月に公開した。
 - ・学際的共同研究として、アワビ加工実験をおこなった。現在、伊勢神宮の神饌として加工されているノシアワビを参考として、古代のアワビ貢納の実態を探り、加工法の解明に加え、長腹の生産が保存・運搬の便に加え旨味成分の増加等にも効果があったことなどを明らかにした。

I-③ 研究成果等の情報発信

本共同研究に関して情報発信した内容（公開講座、公開講演会も含む）を、要点を含め簡潔に記入してください。

- ・期間中、全体研究会を公開にて 12 回開催した。対面で開催していた時期でも毎回正規メンバー以外も含めて 30～40 名程度の参加者があり、2020 年度のオンライン開催時には 51 名が参加することもあった。
- ・2016 年 8 月 23 日～9 月 19 日に特集展示『『延喜式』ってなに!?!』を開催し、会期中に歴博フォーラムを開催した（事前に 316 名の申込みがあり、当日の入場者は 257 名）。
- ・2017 年 4 月 27 日～6 月 27 日に文科省庁舎エントランス展示「古代の百科全書『延喜式』に学ぶ、いにしへの暮らし」を開催した。会期中の 5 月 26 日には講演会「『延喜式』から読み解く古代の社会と文化」を開催した。
- ・2018 年度にモバイルミュージアム展示企画として「古代国家とアワビ～『延喜式』にみる生産と貢納」を制作した（以降、数度にわたって歴博や成田市芸術文化センター・日本科学未来館等にて展示）。
- ・2019 年 12 月に中間報告として『研究報告』218 を刊行した（論考 24 本掲載、総頁数 508 頁）。その他、通常号やその他の雑誌等にも研究成果を投稿し掲載された。
- ・2021 年 3 月に清武雄二『アワビと古代国家－『延喜式』にみる食材の生産と管理』（ブックレット〈書物をひらく〉24）（平凡社、100 頁）を刊行した。
- ・基幹研究プロジェクト主催の総合書物学シンポジウム「書物を耕す－総合書物学の挑戦」（2019 年 2 月 17 日奈良女子大学）、同「『総合書物学』の現在」（2021 年 12 月 26 日オンライン）にて中間成果報告および 6 年間の活動総括の報告をおこなった。
- ・2022 年 2 月 21 日に人間文化研究機構・読売調査研究機構主催によるオンライン講座「大手町アカデミア×人間文化研究機構 オンライン無料特別講座「鮎鱈」が伝える食文化と古代日本史～平安時代の行政マニュアル『延喜式』を読み解く～」(講師：清武雄二、ナビゲーター：河合佐知子)をおこなった (YouTube による無料オンライン配信。事前申込者数 496 名、当日参加者数 329 名。寄せられた質問・感想は講座中に 62 件、講座直後に 120 件)。
- ・九州史学研究会 (2017 年 10 月)・皇学館大学史学会 (2019 年 11 月) 等にて公開講演をおこなった。

II. 連携による成果

研究代表者の自己評価

A : 優れている

II-① 連携体制及びその有効性

歴博の共同研究として位置付けたことの効果及びその有効性（館内の共同研究、広報との連携）について、また他機関や機構との間の連携に成果があげられたか、簡潔に記入してください。

- ・館内にプロジェクトの活動が認知されることにより、自発的な成果発信に加えて、モバイルミュージアム展示やくらしの植物苑観察会、歴史系総合誌『歴博』特集等、多くの館内プロジェクトと協力して成果発信を進めることが可能となった。
- ・また、機構および国文学研究資料館のプロジェクトでもあることから、それぞれより成果発信についての声かけがあり、2017 年の文科省庁舎エントランス展示、2019 年の総合書物学シンポジウム「書物を耕す－総合書物学の挑戦」、2021 年の総合書物学シンポジウム「『総合書物学』の現在」、2021 年のブックレット『アワビと古代国家－『延喜式』にみる食材の生産と管理』刊行、2022 年のオンライン無料講座等の成果発信につながった。
- ・国立国語研究所とは TEI や「日本語歴史コーパス 奈良時代篇Ⅲ祝詞」作成に協力した。

III. 若手研究者の育成

研究代表者の自己評価

A : 優れている

III-① 若手研究者の育成

本共同研究を推進する中で、若手研究者に対し、どのような育成の取組を行ったか記入してください。

- ・積極的に院生等若手をRAや資料整理等補助員等のかたちで雇用し、文献目録等データ作成・入力、TEIデータ作成、写本校訂・現代語訳等の作業に取り組んでもらうとともに、分科会・研究会・国際研究集会における口頭報告の機会を積極的に設けた。RA4名のうち2名は常勤研究職に就職し(他2名は在学中)、補助業務に従事した院生2名は博物館に学芸員として就職した。これらの元RA等3名、また研究協力者として参加した院生1名については就職後に共同研究員に追加した。なお、RA・研究協力者・資料整理等補助員には『研究報告』通常号への投稿等、成果の公表を奨励した。
- ・関連科研費の支援研究員として雇用した若手研究者(共同研究員)に科研費への応募を奨励し、2022年度には若手研究に採択された。
- ・アメリカの大学院生2名を研究協力者とし、ワークショップ等を通じて研究活動への支援をおこなった。
- ・院生クラスを対象とした史料学に関する講演会を2021年度に2回実施(オンライン 第1回88名参加、第2回100名参加)し、講演会記録集を刊行した(A4判、129頁。同記録集は今後、ネット公開の予定)。

Ⅲ-② 若手研究者の参加状況

区分(年齢は参加当初)	所属機関数	延べ参加回数
40歳未満の若手研究者 14名	10	74
リサーチアシスタント(RA) 4名	2	24
大学院学生 13名	9	52
合計 31名	21	150

※若手研究者：参加(開始)時40歳未満の研究者

※所属機関数は重複を除いた実数

※1つの研究会等に若手研究者2名が2日間参加した場合、参加人数2、延べ人数4となる。

IV. 今後の展望、その他特記事項

研究代表者の自己評価

A：優れている

IV-① 今後の学術研究の基盤強化と展開

本共同研究及びその成果を活用した今後の研究の方向性等、展望及び課題を記入してください。また、今後の学術研究の基盤強化にあたって活用できる点、反省すべき点があれば、具体的に記入してください。

- ・成果報告として『研究報告』特集号の2023年度刊行をめざす。
- ・本文校訂・現代語訳・英訳・データベース構築は、次期プロジェクトにおいて中心課題として推進する計画である。
- ・『延喜式』からうかがえる古代の技術生産や物産・貢納については今後、正倉院宝物等の関連資料も視野に入れ、館で制作している正倉院文書複製も活用した企画展示を構想したい。
- ・新たな『延喜式』写本・版本の存在が2022年3月に公表された。現在は所蔵機関で調査中のため非公開であるが、公開されたあかつきには調査を実施し、本共同研究の成果が永続的なものとなるよう、検証・修正をおこなっていききたい。
- ・中近世における『延喜式』受容や『延喜式』研究の解明が重要な課題であることは認識しており、中村光一「江戸時代における『延喜式』研究の一様相」(『研究報告』218掲載)等、幾つかの成果は挙げられたが、さらに展開する余裕がなく、十分に深めることはできなかった。
- ・本共同研究では機構経費で特任助教が配置されたことにより、機構・主導機関との連絡や全体運営等をスムーズにおこなうことができ、ひいては個々の研究の進展にも貢献した(次期には配置なし)。

- 研究を推進するため、法政大学国際日本学研究所（関係論文目録データベース協力）・東京医療保健大学（主として食品学関係協力）・東海大学海洋学部（主として水産学関係協力）と交流協定を結んだ。この他、食品成分分析について機構が協定を結んだ味の素食の文化センターの協力を得、味の素株式会社とは「学術協力にかかる契約書」を取り交わした。なお、現状では機構における企業との連携は、委託研究や企業の寄附が想定されており、守秘義務の問題等、実際の協力関係構築にあたっては課題が多い。
- 本共同研究開始前に1年6か月の準備研究期間が設けられたことは、研究計画を練り上げる手助けとなった。

IV-② その他特記事項（優れた取組等）

その他特記事項があれば、記入してください。

- 広島市立大学において、2018年度以降、共同研究員が『延喜式』英訳に取り組むゼミ活動を実施した。
- 東海大学海洋学部における学生による新商品開発教育プログラム（伝統食品塩カツオを利用した商品開発）に協力した。また東京医療保健大学の卒研ゼミ活動に協力した。

外部評価 評価結果報告書

令和 5 年 1 月 6 日
外部評価委員会

1. 評価結果

研究課題名	古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究
研究代表者名	小倉 慈司
評価	A
評価所見	<p>(優れた点)</p> <p>本研究プロジェクトは、日本古代史の基本文献である『延喜式』に関する文理融合の学術的協働による研究であり、土御門家旧蔵の写本を中心とした『延喜式』の新校訂に着手し、現代語訳を加えて内容の検討を深めている。以下のような優れた点が認められる。</p> <p>○情報資料学・植物分類学・水産学・美術工芸・考古学研究者を加えて、『延喜式』を多様な観点から分析し、その成果を蓄積、研究報告書等で公開したことは高く評価できる。特に、全体研究会を 12 回公開で開催、特集展示、『研究報告』218 の刊行など、研究成果の発信も積極的に行った。新たな『研究報告』特集号の 2023 年度刊行を目指しているのも評価できる。</p> <p>○日本の古典を海外の研究者と共同研究を行うという研究の姿勢と体制は今後の日本の史料学の学際的研究の展開のための多角的視点からの検証という意味で、非常に優れたものと判断できる。</p> <p>○海外からの研究参与の可能性を広げる英訳文公開なども積極的に行われており、高く評価できる。館蔵資料の利活用という面でも効果を挙げている。</p> <p>○海外も含めた幅広い分野の研究者や一般の人々の『延喜式』の活用ために、データベース構築を具体的に推進した点が評価できる。</p> <p>○若手研究者を積極的に登用し、その一人が『延喜式』の単位表記に関する TEI 拡張スキーマについての考察を発表するなど、重要な貢献をした。</p> <p>以上のように、当初の研究目標である分野の枠を越えた協働研究は達成されており、研究成果も着実に上げている。他機関との連携、海外発信、多分野の研究者との連携さらには若手の育成にも成果があり、評価できる。本プロジェクトの取り組みは持続的な多分野連携による研究プラットフォーム形成の基礎となるものと期待される。</p> <p>(課題)</p> <p>課題として以下の点が指摘できる。</p> <p>○テキストから抽出される情報の精度を高めること (写本の調査研究)、情報の活用ツールを整備すること (翻訳及びデータベースの作成)、情報の解析・分析を進めること (多様な学術分野からの内容検討) の成果が一部に止まったのは残念である。</p>

	<p>○予定していたフィールドワークが実施できなかった。今後の研究の発展に資する重要な活動であるので、引き続き取り組まれることを期待したい。</p> <p>○東アジア史については、コロナ禍のもと、交流が困難であったと思われるが、今後持続的な研究交流が求められる。</p> <p>○データベース公開については、今後も国立歴史民俗博物館の中で、持続的な内容充実のための対応が必要である。</p> <p>○朝鮮半島の食品や薬品との比較研究は重要な研究分野であり、今後とも推進されたい。自己評価書の記載にもある「医学との連携不足」は今後の研究展開において進められるべき課題と思われる。とくに、「古代の知識や技術の現代的活用など新たな視点に基づいた研究の創出」という点で、薬学（創薬部門）との協業などがあればより効果的かつ斬新な研究が展開される可能性もあり、これらも今後の研究展開において考慮していただきたい。</p> <p>○中近世における『延喜式』の受容研究も興味深いテーマであるとともにテキスト研究の基本でもあるので、今後取り組まれることを期待する。</p>
--	---

2. その他（自由記述）

<p>所見等</p>	<p>（その他共同研究についての意見等）</p> <p>○本共同研究の準備期間を設けた効果があったと考えられる。具体的にどのような点（研究体制を構築する準備期間が取れたなど）で効果があったのか記録しておくことが、次期の研究の開始に際し参考となる。</p>
------------	---

2023年3月7日
研究推進センター

国立歴史民俗博物館 基幹研究プロジェクト歴博ユニット（2016～2021年度）外部評価
結果を受けて指摘された課題に対する研究推進センターとしての取り組み

2016年度～2021年度にかけて実施した人間文化研究機構基幹研究プロジェクト歴博ユニットの外部評価結果について、研究推進センターとして以下の諸点につき、フォローアップをしていきたいと考えている。

1.研究の継続的展開

期間が限定された研究プロジェクトの成果や残された課題を、終了後にどのように継承、あるいは克服・解決し、活かしていくかは、検討すべき大きな問題である。まずは館内でご指摘を共有することが第一であるが、長く活かしていく方策について、今後、検討していきたい。今回、評価対象となったプロジェクトは、一部力点を変えつつ継承発展させていく予定であるため、ご指摘いただいた、情報精度の精緻化、情報活用ツールの整備、情報解析・分析の進展等について、留意しつつ、推進させたい。

2.国際交流・国際研究、地域研究、異分野との連携

新型コロナウイルス感染症の流行はフィールドワークの実施や国際的研究交流実施の大きな妨げとなった。流行はいまだ完全に収束したとは言えない状況であるが、いずれも一度途絶えれば、元に戻すのに多大な労力がかかることは疑いない。研究推進センターとしては、国際企画室と連携しつつ、国際交流・国際研究、地域研究が進めやすくなるよう支援していきたい。また異分野との協業についても、館として支えていくことは考えられないか、検討課題としたい。

3.データベースの持続的充実

データベース公開について、「今後も国立歴史民俗博物館の中で、持続的な内容充実のための対応が必要である」とのご指摘をいただいた。データベース構築は、研究成果公表の大きな柱の一つとなっており、新たな情報基盤システムとなる khirin の開発を進めているメタ資料学研究センターやデータベースを所轄する博物館資源センターと連携しつつ、どのような具体的対応策が考えられるのか、検討していきたい。

4.準備研究の効果

外部評価の対象となった2016～2021年度基幹研究プロジェクト歴博ユニットは、機構の

方針により、約1年6か月にわたる準備研究を実施することができた。この点につき、「本共同研究の準備期間を設けた効果があったと考えられる。具体的にどのような点（研究体制を構築する準備期間が取れたなど）で効果があったのか記録しておくことが、次期の研究の開始に際し参考となる」とのご所見をいただいた。ご指摘のあった研究体制の構築に加えて、写本の所在調査、また外部資金獲得のための準備を進めることができた点などを挙げるができる。実際のところ、機構より配分される予算に加え、科研費を獲得して関連研究を進めることができたことが、十分な成果が挙げられた要因の一つでもあった。

館として全共同研究に準備研究期間を設けることは難しく、予算逼迫のなかでむしろ縮小傾向にあるのが実状であるが、創発的研究に対する支援を行なうことによって、準備研究の一助としていきたいと考える。